

ドラキュラとコンラッド
——19世紀末イギリスにおけるゼノフォビアと
東欧人の自伝的語りについて——

伊 藤 正 範

I イン트로ダクション

1878年、英語もおぼつかない20歳のポーランド人船員が初めてイギリスの土を踏んだ。そのわずか2年後に彼はイギリス商務省が実施する二等航海士の試験に合格、さらに2年後に一等航海士、そして1886年に船長の免状を得ると、同年にイギリスに帰化を果たし、その後も商船の乗り手として、「日が沈まない帝国」の植民地貿易の一端を担っていく。それが1895年、*Almayer's Folly* の出版によって小説家へと驚異の転身を果たすことになった——そして後に F. R. Leavis がイギリスを代表する「大いなる伝統」の一人に数えることになった——Joseph Conrad である。

その出自もまた変転に満ちている。父親の Apollo はポーランドの貴族階級の生まれであったが、すでに居住地ウクライナは、18世紀末に行われた三国によるポーランド分割によりロシア領土となっていた¹⁾。故郷の喪失という苦難の時代において、アポロはポーランド解放に向け、帝政ロシアとの闘争に積極的に加担していくことになる²⁾。だが、抵抗運動に対して強硬な姿

1) イギリス流に言えばアポロは称号を得た地主階級、すなわちジェントリということになるが、ポーランドの支配者階級 (*szlachta*) においては、特に貴族とジェントリとを区別することなく、法的にも同等のものとして扱うのが通例だった (Najder, *Chronicle* 3)。

2) ポーランドの愛国主義運動でも特に過激な派閥に属していたアポロは、1861年の二つ

勢を示し始めたロシア政府により、1861年にアポロは逮捕、翌年、家族を伴っての流刑に処される。そして流刑地の過酷な気候により健康を害した母 Ewelina は、7歳のコンラッドを置いてこの世を去り、アポロもまたコンラッドが11歳のときに死去する。その後、おじ Tadeusz の支援を受けたコンラッドは、16歳のときにフランスのマルセイユで船員生活を始め、4年後、その生涯の地となるイギリスへと渡ったのである。

さて、コンラッドの処女作出版から下ること2年、もう一人の東欧人がイギリスに現れる。かの有名な吸血鬼、Dracula である。架空の存在であるということを度外視すれば、1897年に出版された Bram Stoker の *Dracula* においてイギリスに到来するこのモンスターは、意外にもコンラッドとの共通点を多く持つ³⁾。まず彼は、東欧の貴族の末裔である。そしてその故郷トランシルバニアは、ローマ帝国を始めとするさまざまなヨーロッパ諸国による支配を経て、12世紀にハンガリー王国の支配下に組み入れられ、さらには16世紀のオスマン帝国によるハンガリー三分割により、オスマン帝国の保護下に置かれる。ドラキュラの祖先（あるいはドラキュラ本人）は、そうした故郷の複雑な侵略・征服の歴史に、アポロと同様、闘士として関わってきたのである (*Dracula* 28-30)⁴⁾。

加えてこの二人は、船舶の歴史との関連においても共通点を抱える。船員としてのコンラッドは、そのキャリアのほとんどを帆船の乗組員として過ごしたことで知られている。だが19世紀末のこの時代、すでに帆船は旧時代の遺物になりつつあった。長きにわたってイギリス植民地貿易の屋台骨であり続けた帆船であるが、技術革新による汽船の登場・進歩と、交易における確

のデモの指揮や、政治的パンフレットの執筆などを通して中心的な立場で活動していた (Baines 10-11)。

- 3) 日記体形式の『ドラキュラ』においては、月日が詳細に示される一方、年号は最後まで明らかにならない。物語が設定されている年代については諸説あるが (丹治 9-25 参照)、少なくとも「出版」という出来事の象徴性を通して、吸血鬼ドラキュラ伯爵はまさしく1897年にイギリスに到来したと言える。
- 4) なみに16世紀末にはトランシルバニア公 Báthory István がポーランド国王となっている。歴史的に見ても両国の結びつきは決して浅くない。

実性・迅速性を求める声に押され、1880年にはそれぞれ5,498,000純トンと2,949,000純トンであった帆船と汽船の比率は、わずか10年後に4,274,000純トンと5,414,000純トンへと逆転する（Hope 307）⁵⁾。すなわち1890年代前半まで船員として活躍したこのポーランド人は、新時代の到来を洋上で目の当たりにしながらなお、帆船にその身を置き続けたのである。そして、汽船が「自然との親近感」（*Mirror of the Sea* 30）を欠いているというコンラッドの指摘や、自らを「一度も汽船に乗ったことのない暗黒時代の船員の唯一の生き残り」（*Personal Record* 117）になぞらえる記述からは、彼が自らの意志をもって帆船を選び続けたことを伺うことができる⁶⁾。

他方で、トランシルバニアからはるばる海を渡ってきたドラキュラが乗るのが、スクナーと呼ばれる縦帆式帆船である。確かに東欧の古城に住む貴族の末裔に、蒸気機関から黒い煙を吐き出す汽船は似つかわしくない。それに、そもそも帆船といえば、ノルマン人の征服を描くバイユーのタペストリーを始めとして、古来より繰り返されてきた民族間の侵略・征服の図像に欠かせない道具立ての一つである。セーケイ民族の末裔であり、そこにウゴル族、フン族などの侵略民族の血が混じっていることを自ら強調する——自分たちが「侵略民族である」（28）とうそぶく——ドラキュラには、帆船はまさにふさわしい乗り物だ。19世紀末、イギリスを始めとするヨーロッパ各国が植民地獲得競争でしのぎを削る時代において、満帆の帆船を操り、嵐が吹き荒れる港町ホイットビーに上陸するドラキュラこそは、旧世界の象徴であり、イギリスに襲来する「逆侵略者」なのだ。そこに、丹治愛が指摘する侵略恐怖やゼノフォビアといった、当時のイギリス社会が外国に対して抱いていた不安症を重ね合わせるのには難しいことではない⁷⁾。

- 5) 積み荷の遅延・不着が船主にしばしば致命的な損害をもたらす中で、積載量や天候に左右されない安定性を誇る汽船が台頭していったのは、当然の流れであったと言える。1869年のスエズ運河開通などの出来事も、帆船から汽船への切り替えを後押しした。Hope 298, Chatterton 272 参照。
- 6) ただ実際にはコンラッドは二つの汽船に乗り組んでいるし（うち一つは出港せず）、それ以前にも何度か汽船のポストを得ようと試みて失敗している。
- 7) 丹治29、177参照。

ではコンラッドは〈ドラキュラ〉たりえなかったのか。言い換えれば、同じ東欧の（そして侵略された過去を持つ）ウクライナから渡英し、帆船で世界を巡ったこの貴族の末裔が、ドラキュラ同様、ゼノフォビアの対象となる可能性はイギリス社会に内在しなかったのだろうか。一部の知識人の間に限られていたとはいえ、処女作出版の時点ですでにその完成度と芸術性に高い評価を受けていたコンラッドは、一見すると「イギリス小説家」としてすんなりこの国に受け入れられていったようにも見える。だが、1907年の *The Secret Agent* 出版の直後、コンラッドから友人 Edward Garnett に宛てられた一通の書簡からは、そうした見方を打ち消すような彼の姿が現れてくる。

I've been so cried up of late as a sort of freak, an amazing bloody foreigner writing in English (every blessed review of S.A. [*The Secret Agent*] had it so—and even yours) that anything I say will be discounted on that ground by the public—that is if the public, that mysterious beast, takes any notice whatever—which I doubt. (“To Edward Garnett” 488)

「外国人」であるがゆえに、自らの作品への正当な評価を受けられないことへの不満をおちまけるコンラッドは、その矛先を書簡の受取人であるガーネットにも向けている。先立つこと1週間、*Nation* に掲載された書評で、ガーネットは出版されたばかりの友人の小説をこう称えていた。

It is good for us English to have Mr. Conrad in our midst visualising for us aspects of life we are constitutionally unable to perceive, for by his astonishing mastery of our tongue he makes clear to his English audience those secrets of Slav thought and feeling which seem so strange and inaccessible in their native language. (191)

「私たち」と「彼」、「イギリス人」と「スラブ人」——ガーネットにとって、そして大部分のイギリス人読者にとって、10年以上にわたってすでに何冊もの傑作を世に送り出し、(売れっ子とは決して言えなかったが) 高い評価を獲得し続けてきたコンラッドは、なおも「見慣れぬもの」の一部にすぎなかったのである⁸⁾。コンラッドの苛立ちとは、自らが故国として選んだ国におい

て、永遠に〈異〉なるものとしてしか認められないことへの失望感を物語っている⁹⁾。

これまでの研究において、ポーランド人としてのコンラッドの出自が作品に及ぼした影響を探る試みは、数多くなされてきた¹⁰⁾。それらがコンラッド文学の本質を見極めるための有用なステップであることは疑いを容れないが、その一方で、イギリスの外国不安症の情勢図上におけるコンラッドの潜在的な位置づけがテキストにどのような影響を及ぼしているかについては、これまであまり光が当てられてこなかった。本論文では、テロリズム不安や退化論など、当時のコンラッドを取り囲んでいたさまざまなゼノフォビア的言説を参照しながら、それらが彼のフィクションにおいてどのような痕跡を残しているかを探っていく。さらにコンラッドの自伝的テキストを検証することによって、最終的には語りによる自己表出の試みとその可能性にメスを入れていく。

II 病とゼノフォビア

1897年に出版されたコンラッドの *The Nigger of the "Narcissus"* には、出版年以外にも『ドラキュラ』との共通点を多く見出すことができる。一例として、S. T. Coleridge の *The Rime of the Ancient Mariner* (1798) を想起させる、帆船を舞台にした苦難の航海の物語と、そこに影を落とす病と死のイメージは、『ドラキュラ』第7章に挿入された帆船 Demeter 号の航海日誌によ

8) John Galsworthy の「私たち西洋人が言うところの『異国的な雰囲気』の作り手」(137)であるとする追悼文にも、コンラッドが生涯を通して結局「異国人」であり続けた様子が読み取れる。

9) Edward Said が示唆するように、「私たち」と「彼ら」への区分こそが、〈西〉と〈東〉の地勢図を作り出し、数々の血なまぐさい排斥をもたらしてきたものに他ならない(88)。

10) 例えば *Lord Jim, Under Western Eyes* や “The Secret Sharer” における「誠実性」、「裏切り」というテーマとポーランドを去った過去との関連性 (Najder, *Polish* 23; Baines 352), *Nostromo* の舞台である架空の国コスタグアナとポーランドの類似性 (Baines 313)、女性登場人物におけるポーランド文学の影響 (Susan Jones 34)、さらにはコンラッドの文体に及んでいるポーランド語の影響 (Najder, *Polish* 29; Morzinski 153-76) などが挙げられる。

って共有されている。黒海を出発しイギリスに針路を取るディミーター号では、奇怪なことに乗組員が一人、また一人と失踪を遂げていく。船上をさまよう謎の人物の影に脅えながら、嵐を乗り越え目的地に急ぐ中、船にはとうとう船長と一等航海士を残すのみとなってしまう。そして、船倉に大量に積まれた怪しい木箱を調べに行った一等航海士もまた、狂乱状態で戻ってくるとそのまま海中に身を投じる。船長の日誌はここで途切れるが、作中に引用された新聞記事には、嵐の中、満帆で海岸に乗り上げたディミーター号の舵輪に、船長が自らを鎖付き十字架で縛り付けたまま絶命している様子が伝えられている。

このディミーター号のエピソードにおいて注目すべきは、東欧よりイギリスに到来する帆船と、疫病に冒される船のイメージとが（水夫たちが次々に死んでいく『老水夫行』と並べるとこのイメージはことさら明確になる）重なり合っている点である。丹治が指摘するように、『ドラキュラ』というテキストにはそもそも、19世紀に流行を繰り返したコレラなどの疫病に対する恐怖と、ヴィクトリア朝末期のイギリスが抱えていたゼノフォビアとが同時に内包されている（177）。つまりイギリスを襲い来る異国人ドラキュラとは、国外から侵入してくる死の病でもあり、検疫し、根絶すべき対象に他ならないのだ。

そういった意味では、『ナーシサス号の黒人』もまた、病への不安とゼノフォビアを確実に包摂している。帆船ナーシサス号が、イギリスへの帰途に就くべくボンベイで出港を待つ間、ごった返す船首楼の水夫部屋には、イギリス人に加えて何人かの外国人船員の姿がある。中でも、ロシア系フィンランド人の Wamibo は変わった風采を呈する。ピンクの縦縞模様が入った黄色いシャツを着て、もじゃもじゃ頭の下にいつも「夢見るような目つき」を湛える彼は、船首楼の喧噪の中でも「まるで背骨のない聾者のようにぐにゃりとさえない様子で、じっと動かずに」いるのだ（5-9）。そうしたワミボウに攻撃の矛先を向けるのは、「俺はイギリス人だ」（12）と誇らしげに宣言する船員 Donkin である。ワミボウが、「その人種によく取り憑くヘンテコな

幻影でもおそらく頭の中で巡らせながら」、ほんやりと行く手を遮っているのに腹を立てたドンキンは、「オランダ人め」(“Dutchy”)と侮蔑の言葉を投げつけながら、他の船員たちに向き直ってこう続ける。

“Those damned furriners should be kept under,” opined the amiable Donkin to the forecastle. “If you don’t teach ’em their place they put on you like anythink.” He flung all his worldly possessions into the empty bed-place, gauged with another shrewd look the risks of the proceeding, then leaped up to the Finn, who stood pensive and dull. —“I’ll teach you to swell around,” he yelled. “I’ll plug your eyes for you, you blooming square-head.” (13)

「でくのぼう」(“square-head”)という語は、主にドイツ人、オランダ人、スカンジナビア人(時にフィンランド人を含む)を対象にした侮蔑語であり、先の「オランダ人め」という罵りと併せて、「くそつたれの外国人ども」(“damned furriners”)を十把一絡げに嫌悪するドンキンの外国人観の特徴をよく表している。

実はこの背景には、19世紀末のイギリス商船と外国人船員とを取り巻く状況の変化を見て取ることができる。海事雑誌 *Fairplay* の1885年2月13日号に掲載された、現役船長によるものと思われる記事では、出港時に「イギリス人乗組員の半数以上が乗船していなかったり酩酊状態にあったりする」一方で、ノルウェー人、スウェーデン人、ドイツ人船員は「常に持ち場に着き、清潔な身なりで礼儀正しく振る舞っている」ことが指摘されている(Captain 327)。この記事に対しては、その後、やはり現役の船長からの、(長期間にわたって港に停泊することを余儀なくされたが)イギリス人船員の「飲酒は一件もなかった」(Toledo 394)とする比較的冷静な報告から、今や外国人船員はイギリス商船の乗組員の「50~60パーセントを占めて」おり、その数は「日々増え続け、やがてイギリス人を絶滅に至らしめるだろう」(Salt 16)という極端な意見に至るまで、数々の反論が寄せられる¹¹⁾。翌年3月6日号

11) 『ナーシサス号の黒人』においては、ワミボウ、ウェイトに加えて、「二人のノルウェー人」(9)が外国人船員として言及されているが、コンラッドが二等航海士として乗

の船舶関係者の集会に関する記事では、“Mr. Donkin”なる船主が、「他の船主たちにイギリス人船員の雇用を優先するよう呼びかけた」（“Foreign Sailors in British Ships” 142）ことが伝えられており、そこからは、イギリス人船員擁護の運動とそれに伴う外国人船員排斥の風潮が、一定規模のものであったことが伺える。この発言者「ドンキン氏」が小説の「ドンキン」とどのような関わりにあるかは憶測の域を出ないが、『ナーシサス号の黒人』という小説が、ドンキンという人物の視点を通して、当時のイギリスに渦巻くゼノフォビアを再現していることは確かであろう。

そしてこの小説のタイトルにもなっている黒人 Wait こそが、そうしたゼノフォビアと病とが重なり合う交点となっている¹²⁾。点呼の最中、遅れて乗船してきたこの新人船員は、どうやら肺を患っているらしい。孤独に洋上を進むナーシサス号の上で次第にウェイトは衰えていき、最後には命を落とすのだが、この彼の肺病に関して特徴的なのは、初めのうちその真偽がまったく定かにならないという点である。嘘とも本当ともつかない咳を繰り返すウェイトは、仕事を免除され、襲い来る嵐に他の船員たちが力を合わせて立ち向かう中、特権的に与えられたキャビンで一人わがまま放題の船上生活を送る。ここにおいて身体の病は、船上の団結心や信頼を冒す倫理的な病にまで拡大している。そしてそれは同時に、船の秩序をも蝕む。ウェイトを仮病と断じ、仕事に復帰するよう求める船長に対して、一部の船員たちが次第に反感を募らせ、ついには水夫たちをも二分しての暴動に発展するからである。仮にナーシサス号をイギリスという国家の提喩として捉えるならば、ウェイト

船した実際の「ナーシサス号」には、7人のスカンジナビア人が乗船し、コンラッドを含めた外国人船員の数は10人と、全乗組員の半数を占めていた（Najder, *Chronicle* 82）。1853年に外国人乗員数の制限が撤廃されて以来、イギリス船における外国人船員が増加したことが、こうしたゼノフォビア的発言の背景にある。制限の撤廃に関しては Hope 288 参照。

12) ウェイトのモデルは、現実の「ナーシサス号」に乗船していた Joseph Barron という船員（航海途中で死亡）と考えられてる。Ian Watt は当時の関連書類から、この船員が英領西インド諸島周辺の出身であると推測している（90）。実際に小説中では、ウェイトが西インド諸島のセントキッツ島の出身であることが示唆されている（*Nigger* 37）。

トこそはその安定性と一貫性を侵害するべく異国から入り込んできた混乱要素に他ならない。このように病と異邦人の結びつきを通して、『ドラキュラ』と『ナーシサス号の黒人』は、ヴィクトリア朝末期のゼノフォビアを確実に共有しているのである。

Ⅲ 〈東〉のテロリスト、〈西〉のテロリスト

しかしながら、『ナーシサス号の黒人』における〈異〉なるものの表象が、ドラキュラ的なゼノフォビアと完全に一致するという分析は正確ではない。というのも、テキストが内包するもう一人の〈ドラキュラ〉を通して、病の源は〈外〉から〈内〉へと巧みにすり替えられてしまうからである。

注目するのは船上の暴動を煽った張本人、ドンキンである。「やっちまえ、あたりは暗いぞ！」というかけ声で船員たちを煽ると同時に、ドンキンは「右腕を風車のように振り回し」、士官たちに向かって何かを投げ捨てる(123)。翌日、並んだ船員たちを前に船長がポケットから取り出すのは、ビレーピンと呼ばれる金属製の船具である(135)。ビレーピンとは先端が膨らみを帯びたマッチ棒状の船具で、帆やマストから延びるロープを船体に固定するために、大小さまざまなものが船の至る所に配置されている。腕を振り回して投げるほどのものであれば十分な殺傷力を持つであろうし、何よりもその形状は投擲用に握りを付けられた爆弾によく似ている。Jacques Berthoud の言葉を借りれば、ドンキンとは「飛び道具」を手に、労働者たちを管理階級への反逆へと導く「煽動工作員」(Joseph Conrad 36)に他ならない¹³⁾。

13) バートゥーが「国粋的社会主義者」(“National Socialist,” Joseph Conrad 36)と定義づけるように、船員の労働者としての権利を声高に主張する(そして外国人船員に侮蔑的な声を投げつける)ドンキンは、正確にはテロリストというよりも、(人種的偏見を伴った)社会主義者と言ったほうが適切かもしれない。(Donkin の人種主義と外国人嫌いに關しては Shaffer 55 参照。)他方、Laqueur が「アナーキスト、社会主義者、ニヒリスト、急進派はみな同類だと考えられていた」(14)と述べるように、彼らの間に線引きをすることは当時、一般的ではなかった。また、1885年1月のロンドン同時多発テロの直後にシカゴで開かれた社会主義者の集会において、事件が賞賛された

アナキストの「行動によるプロパガンダ」が最盛期を迎えた1890年代、爆弾を投げるテロリストの姿は、ヨーロッパ大陸を連日のように脅かしていた。他方、アナキストに対して寛容な姿勢を打ち出していたイギリスは、彼らの隠れ家ともいえる役割を果たしており、現実にもその標的となることはほとんどなかった¹⁴⁾。折しもジャーナリズム全盛の時代、新聞を経由してセンセーショナルに報道される大陸の爆弾事件は、イギリスにとって、まさに〈外〉から〈内〉を、〈東〉から〈西〉を脅かす脅威に他ならなかったのである¹⁵⁾。そしてこの意味において、ドラキュラはまさにテロリストであった。トランシルバニアという〈東〉に巣くう「恐怖」(terror)が、自らの領域を蹂躪するだけでは飽きたらず、ついにイギリスという〈西〉に侵入してくる物語——それが1897年に出版された『ドラキュラ』なのである。

だが、『ナーシサス号の黒人』において「爆弾」を投げるテロリストには、そうした〈東〉と〈西〉の関係図は単純に当てはまらない。「俺はイギリス人だ、俺はな」(12)——誇らしげにそう宣言するドンキンは紛れもないイギリス人であり、前述のようにワミボウへ侮蔑語を投げつける姿からは、むしろドンキンこそがゼノフォビアの発信源であることが読み取れる。そして作中で描写されるドンキンの身体的特徴は、テキストにおける東西地図をさらに複雑化する。まず、ドンキンの突き出すほどの「大きな耳」は、「透き通

こと、ダイナマイトの使用が推奨されたことが、当時の新聞に報じられている(“The Outrages Applauded by Socialists”)

- 14) この静寂をやぶったのが、『密偵』が下敷きになっている1894年のグリニッジ天文台爆破未遂事件である。イギリスが直接的に爆弾のターゲットにされたのは、O'Donovan Rossa 率いるアイルランドのフェニアン運動が活性化した1880年代である。ヴィクトリア駅、警視庁、ロンドン橋などの公共建築物が次々に爆破され、特に1885年1月24日のウェストミンスターホール、国会議事堂、ロンドン塔をターゲットにした、今で言う同時多発テロは、白昼だったこともあって多数の負傷者とパニックを生み出した。そうした過去のトラウマが、1890年代のアナキズム不安の背後にあることは確かであろう。
- 15) 後期ヴィクトリア朝とは、中産階級の目覚ましい躍進や労働者階級に対する学校教育の拡大、また印刷技術の向上や電信技術の普及、諸税の廃止に比例して、新聞の発行部数が飛躍的に伸びた時期でもあった(Lea 29-72, 46-49; Curtis 55-57)。特に、1860年代から1880年代にかけて興ったニュー・ジャーナリズムと呼ばれる動きの中で、新聞は、読みやすかつ煽情的・ゴシップ的なスタイルを獲得していく。

っていて血管が浮き出し、コウモリの薄い羽に似ている」(110)。そして「肩甲骨を耳の高さまで突き出し」たその姿は、「尖った鼻」と合わさり、「羽毛を逆立てた病気のハゲワシ」に彼を似せる(128)。こうした身体的な特徴は、コウモりに似ている、というよりコウモリそのものになって闇夜を飛びまわり、薄く「鼻梁が高い」鼻のせいで「ワシのような」様相を呈する(*Dracula* 17)ドラキュラのそれと酷似しているのである。

これに類する描写は、当時のテロリズム事件を報じる新聞記事においても見出すことができる。例えば *Pall Mall Gazette* に掲載された一記事では、捉えられた爆弾テロ犯人のイラストに、その顔が「高い頬骨とやや後退した顎と額」を持っていることを解説する文面が添えられている(“The Dynamite Outrages”)。こうした身体的な奇形をその人物の「退化」(“degeneration”)の徴候と見なし、人間の内在的な堕落を外見から読み取ろうと試みたのが、19世紀末のイタリアの犯罪学者 Cesare Lombroso であった。主著である *Criminal Man* には、犯罪者の耳がしばしば大きく、チンパンジーのように顔から突き出ていること(14)、その鼻が「猛禽類のくちばしに似たワシ鼻になっている」(15)ことが記述されている。すなわちドンキンもドラキュラも、観相学的に同じ類型に属する退化者なのだ¹⁶⁾。

ちなみにイギリスにおけるロンブローゾの受容には、1880年代における社会主義運動の拡大が大きく関わっている¹⁷⁾。危機感を抱いた中産階級の間で、低層階級や労働者階級が生物学的に劣っていると考える考え方が勢いを増し始め、その論点を補強するためにロンブローゾの退化論が急速に受け入れられていったのだ(Gareth Stedman Jones 281-314)。つまり退化とは基本的に、ヴィクトリア朝期のスラムや貧困層で蔓延する「病」であり、中産階級主体の「健全な」社会を蝕むものとして位置づけられていたのである。初登場の

16) ちなみにロンブローゾによると、アナーキストの40パーセントが「犯罪者に特徴的な顔」を持っているという(Lombroso 305)。

17) 1881年にはイギリスで社会民主連合(Social Democratic Federation)が設立され、その指導者たちによって煽動された労働者の暴動が、1886年にロンドンで発生している(Gareth Stedman Jones 291)。

場面において、コックニーを操りながら労働者としての自らの権利をことさら強く主張するドンキンは (*Nigger* 9-12)、社会主義の弁士であると同時に、ロンドンのイースト・エンド出身の労働者である。そして、「たいていの仕事はできず、できる仕事はやろうとしない」(11) 彼は、あるいはその巧みな弁舌で船員たちの暴動を扇動する彼は、不能と怠惰と欺瞞という感染性の「病」を抱え、現実社会の縮図ともいえるナーシサス号を蝕む退化者でもある。物語の終末部、ロンドンに到着したナーシサス号から降りると、ドンキンは「陸で仕事を見つける」(169) ことを宣言し、酒の誘いに応じない船員たちに「働いて飢え死にでもするがいい！」(170) と言い捨てると、ひとり街に消えてゆく¹⁸⁾。これからも「薄汚い口のうまさで、労働者の生きる権利について弁をふるいながら食い扶持を稼いでいくに違いない」(172) と予言されるドンキンは、まさにロンドンの街路をさまよひ、夜な夜な人間の生き血をすすする——正当な労働をせずに「食い扶持を稼ぐ」——〈ドラキュラ〉でありながら、イギリス社会が生み出し、内包する病でもある。すなわち、『ドラキュラ』において病が〈外〉から、あるいは〈東〉から侵入してくる脅威であるのに対して、『ナーシサス号の黒人』において、病は〈内〉なる〈東〉——イギリスが内包するイースト・エンドという領域——にもとよりあるものなのだ。

こうした『ナーシサス号の黒人』における込み入った東西の相関図において、もしコンラッド自身の位置づけを見出そうと試みるならば、我々はすっきりしない答えに直面することになる。コンラッドの周囲を取り巻いたイギリス人たちは、彼の外見を描写しながら、しばしばその「大きなワシ鼻」や、「濃い眉毛から鋭角的に後退した額」に言及する (*Najder, Chronicle* 244-45)¹⁹⁾。そうした語彙は紛れもなくロンブローズの退化論とコンラッドを接

18) ドンキンが船員をやめる理由は、おそらく船長から良い解任状 (discharge) をもらうことができなかつたためであることが作中にて示唆されている (*Nigger* 169)。この時代の船員が職を得るためには、前船長からの悪評価は致命的だった。

19) 「猿のように後退した額」もまたロンブローズが指摘する退化の徴候である (*Lombroso* 242)。

続するものであり、特に鼻や眉の特徴は——前述のワシ鼻に加えて、ドラキュラの眉は「ほとんど鼻の上でつながるほど」に濃い (*Dracula* 17)——まさにドラキュラのそれと一致する。さらに H. G. Wells が、コンラッドの「浅黒く後退した顔」に言及しながら、彼を「ひどく東洋的」(“very Oriental,” Najder, *Chronicle* 242) であると形容する様子には、退化と〈東〉とのシンプルな結び付けを読み取ることもできる。こうした周囲のイギリス人たちが強力な排斥感情をもってコンラッドに接していたわけではもちろんないが、彼らの描写には、ガーネットの書評にも潜む、穏やかなゼノフォビア的衝動が見え隠れするのだ。

だが『ドラキュラ』と異なり、『ナーシサス号の黒人』において、退化はシンプルに〈東〉と結びつかない。ワミボウなどの外国人船員の描写に、船乗り時代のコンラッドの実体験を透かし見ることはできても、それはあくまでも留保付きの一致にすぎない。ドンキンの存在によって、〈東〉と〈西〉の、あるいは〈外〉と〈内〉の相関図が部分的に書き換えられるからである。言い方を変えれば、このテキストの提示するゼノフォビアの歪んだ地図上で、本来コンラッドが配置されるはずの場所はすっぽりと抜け落ちているのである。東欧人の手による語りは、自らを〈ドラキュラ〉から切断することを可能にしているのだろうか。ここに、フィクションの語りを介してのゼノフォビア回避の展望を見出すことができるのだろうか。だが、性急な結論を得る前に、我々はさらに『密偵』におけるテロリストの表象とテキストが織りなす東西地図とを検証していかなければならない。そこには英語という要素を介して捕縛力を強めるゼノフォビアを見出すことになる。

IV 「完璧な」英語

1907年に出版された『密偵』には、Michaelis, Yundt, Ossipon を始めとする、さまざまなアナキストが登場する。中でも、まるで「インフルエンザのよう」(11) に大陸からロンドンに到着する Verloc の描写においては、海を渡ってやってくるテロリズムと病とが、直喩によって明確に結びつけられ

ている²⁰⁾。そして退化という〈病〉もまた、知的障害を抱えた Stevie の人物像を介してテキストに挿入される。ヴァーロックによってグリニッジ天文台爆破計画の実行犯役として利用されるこの青年は、「虚ろに垂れ下が」った下唇を持ち (13)、その耳たぶは、オシポン言うところの「非常に良い退化の典型」(41)である。(オシポン自身、アナーキストでありながら元医学生という過去を持ち、実際にロンブローズを熱烈に信奉している。その彼を経由して退化論はテキストに導入され、『ナーシサス号の黒人』以上に前面に押し出される。) さらに、ヴァーロックに爆弾を供給する「プロフェッサー」もまた退化者である。彼の「平らで大きな耳」や「ドーム状の額」(52)はその紛れもない徴候であり、彼がドラキュラやドンキンと同じ退化者であることを——ドラキュラの額は「高いドーム状」(*Dracula* 17)である——明確に示唆している。そして物語の最終部、彼が人でごった返すロンドンの大通りを「惨めな」身体をさらしながら「ベストのよう」(231)に歩く描写においては、やはり直喩を介してテロリズムと退化と病とが密接に結びつけられている。小説のグリニッジ自爆事件が、実際にフランス人アナーキストによって1894年に引き起こされた事件に基づいていることを考慮に入れると、この物語が再現しているのは、19世紀末においてヨーロッパ大陸を混乱に陥れていたテロリズムが、ついにイギリスに侵入してきた瞬間に他ならない。外国に対してイギリスが抱く不安は、この小説においても確かに——しかもより明白に——内包されている。

だが再び、ゼノフォビアの地図は歪みを見せる。そもそも、小説に登場するアナーキストたちはみな、ドラキュラ的な脅威とはわずかにずれた場所にいるのだ。例えば、安楽な生活に甘んじるオシポンやミケーリスは実質的な暴力とはほど遠いところに位置するし、ダイナマイトによる闘争を過激に語るユントですら、実はこれまで指一本上げたことのない無行動者である²¹⁾。

20) 実際、コンラッドがロンドンで暮らし始めた頃の1889年から1890年にかけて、サンクトペテルブルクで発生が確認されたインフルエンザが、ベルリン、ウィーン、フランスを経てイギリスに入ってきた (Harkness and Reid 416)。現実において病と〈東〉が一致を見せる事例である。

加えて、グリニッジ事件に関わった人物たちはみな、イギリスの外部というよりはむしろ内部に属している。フランス人の父親を持ちながらも「生まれながらのイギリス国民」(22-23)であることを自ら強調するヴァーロックは、イギリスの中産階級の生活をこよなく愛する家庭人であり、その義理の弟であるスティーヴィーは、(母方の先祖がフランス人であることは示唆されるが) ロンドンの下宿屋を営むイギリス人の息子である。そして爆弾の提供者であるプロフェッサーもまた、社会の階梯においてのし上がる夢が潰えた(明言はされていないが文脈からイギリス人であることが伺える) 巡回牧師の息子であり、結局のところ事件はすべて「国産」テロリストたちの手によって実行されたものなのだ。

スティーヴィーの自爆によってグリニッジ天文台にひびひとつ入らなかったことも考えると、爆破事件そのものがそもそもさしたる脅威ではない。もちろん、そうしたカリカチュアこそがゼノフォビアの一形態だと結論づけることも可能だろうが、『ドラキュラ』のテキストを覆う重苦しいゼノフォビアを、『密偵』のアナーキストたちの描写に見出すことはやはり難しい。だが、性急にそう結論づける前にもう一人、考慮から除外してはならない登場人物がいる。

見落としてしまいそうになるが、グリニッジ事件のそもそもの発案者はロシア大使館の一等書記官 Vladimir である。ロンドン社交界の寵児であり(20)、高級クラブの名誉会員であり(163-64)、ハバナ産の葉巻をくゆらす(168-70) このエリート外交官は、ヴァーロック——対照的に「配管工の親方」(26) のように見える——の怠惰をなじりながら、アナーキストを野放しにしておくイギリスの「無能なブルジョワジー」の目を覚まさせるために、偽の爆破計画を実行するよう命じるのだ。

その残忍さが前面に出てくるのが、彼が英語を話す場面である。「君はフランス語がわかると思うが」——そうフランス語で話しかけられたヴァーロックがフランス語で返答する中、ヴラディミールは突如として「意地の悪い蔑み」をもって言語を切り替えると、「外国訛りの痕跡がまるでない英語ら

しい英語」(21)を話し出す。異様ともいえる思考過程を頭わにしながら彼が爆破計画を命じる様子は、それを伝える言語的異質性の欠如とのコントラストの中で、ヴラディミールの禍々しさを増幅させる。この禍々しさにおいて、ヴラディミールはドラキュラとまさに重なり合う。トランシルバニアの閉ざされた山奥に暮らすこの貴族の末裔は、城を訪れたイギリス人 Jonathan Harker が賞賛するほどの達者な英語をしゃべる。どうやら図書室に収集した大量の英書から学んだようなのだ。だが自らの語学力に決して満足しないドラキュラは、ハーカーに対してある依頼をする。

I am content if I am like the rest, so that no man stops if he sees me, or pause in his speaking if he hear my words, to say, “Ha ha! a stranger!”... You shall, I trust, rest here with me a while, so that by our talking I may learn the English intonation; and I would that you tell me when I make error, even of the smallest, in my speaking. (*Dracula* 20)

もしかするとドラキュラがハーカーを呼び寄せたのは、ロンドン近郊の屋敷を購入するためではなく、英語のネイティヴ教員を調達するためだったかもしれない——そう疑いたくなるこの一節には、言語的な異質性を消去することが、ドラキュラのイギリス侵略計画において欠かせない要件であることを見て取ることができる。ハーカーを監禁してからの2ヶ月間弱、イギリスへ発つ前にドラキュラがどれだけイントネーションを直すことができたかはわからない²²⁾。だが、その完成形こそが『密偵』におけるヴラディミールなのだ。イギリス社会の上層に溶け込み、完璧な英語を操るこのロシア人は、実はドラキュラの計画していた侵略計画をドラキュラ以上に完遂した、〈東〉からのテロリストに他ならない。

このヴラディミールの存在によって、『密偵』におけるゼノフォビアの地

21) アナーキストたちの無能さについての議論は、Berthoud, “Secret Agent” 108-9 参照。

22) 少なくともイギリスに発つ直前のドラキュラはまだ、奇妙な擬古体の英語を話し続けている (e.g. “Not an hour shall you wait in my house against your will, though sad am I at your going, and that you so suddenly desire it,” *Dracula* 49)。

図では、欠落していた一片が埋め合わされる。そしてそれと同時に、コンラッド自身をその地図上に配置する余地もまた生まれる。確かにコンラッドは、ヴラディミールのように完璧な英語を話せたわけではない。友人ガーネットは、作家としてデビューしたてのコンラッドが自らの作品の草稿を朗読した際、「たくさんの語を間違っって発音したので聞き取るのが困難だった」(Najder, *Chronicle* 174) ことを述懐しているし、コンラッドが生涯にわたってポーランド訛りのある英語を話し続けたことは、周囲のイギリス人たちによる回顧録に散見される²³⁾。だが、ガーネットは同時に、コンラッドが発音を違えた語が実は、彼が「一度も話し言葉で聞いたことがなく、すべて本から学んだ」ものであることを知り、大いに驚いたと語る (Najder, *Chronicle* 174)²⁴⁾。20歳になってようやく本格的に英語を学び始めたこのポーランド貴族の末裔は、自ら英語で書いた小説をひっさげ、37歳で「イギリス作家」としてデビューする。そして「英語を書く能力」が、自らの他のどんな素質よりも「生得的な」(Author's Note v) ものであるとうそぶくのだ。このいわばイギリス最大の専有物たる英語の収奪者こそが、実は誰よりもドラキュラであり、かつヴラディミールでありえたのである。

V 土と文学

このように19世紀末のイギリスに襲来した吸血鬼ドラキュラとヴラディミールが、〈東〉と〈西〉の相関図上で重なり合う中、ゼノフォビアの網は『密偵』の語りにも張り巡らされ、その書き手であるコンラッド自身をも捕縛しようとしているのだろうか。もちろんヴラディミールは正確にはロシア人であり、コンラッドの父親が命を賭して戦ったいわば敵方の人間である。

23) 例えばゴールズワージーの追悼文において、コンラッドの「強い外国訛り」が指摘されている (135)。1923年、コンラッドが出版社のスタッフを前に行ったスピーチでは、そのポーランド訛りが速記者を困惑させた (Najder, *Chronicle* 476)。

24) Ford Madox Fordも同様に、コンラッドの話す英語が「その意味に関して完全に正確」であったことを記述している (29)。(同時に、「アクセントの付け方がかなり間違っって」いたことも指摘する。)

ゆえにヴラディミールの人物造形に、ロシア人に対するコンラッドの憎悪を見て取ることは難しくない。そしてそれゆえに、トランシルバニア、ポーランド、ロシアを〈東〉として乱暴にくぐることは、慎重に避けなければならないことかもしれない。だがそうした乱暴な一般化こそがまたゼノフォビアのお家芸であることは、『ナーシサス号の黒人』でドンキンがワミボウに投げつけた侮蔑語において証明されているのではないか。

では「語り」とは結局のところ、個人が、言説の作り上げる配置図から逃れられるいかなる可能性も提示しないものなのだろうか。もし自伝的な語りをフィクションの語りと並べてよいならば、我々は *A Personal Record* (1912) の一節に、その悲観論を打ち崩すひとつの可能性を見出すことができる。Anthony Trollope, Dickens, Walter Scott, Thackeray などのイギリス人作家を列挙しながら自らの読書体験を語るうちに、コンラッドの語りはイギリス文学との最初の出会いに言及する。父アポロの流刑に同行した幼いコンラッドが、アポロの部屋に忍び込み、彼が翻訳していた Shakespeare の *The Two Gentlemen of Verona* を眺めていたときのことである。

What emboldened me to clamber into his chair I am sure I don't know, but a couple of hours afterwards he discovered me kneeling in it with my elbows on the table and my head held in both hands over the MS. of loose pages. I was greatly confused, expecting to get into trouble. He stood in the doorway looking at me with some surprise, but the only thing he said after a moment of silence was:

“Read the page aloud.” (71-72)

何かの「自分にはわからない」理由によって父の部屋に入り、結果的に『ヴェローナの二紳士』の草稿を音読させられるというこのエピソードを語ることによって、コンラッドは自らとイギリス文学とのつながりに運命的な彩りを添えようとする。やがて『オールメイヤーの阿房宮』で英語小説を書き始める経緯を、「その辺りに転がっていたペン」(90)を手にしたことで始まったと述懐するコンラッドは、やはり同様に、自らが英語で文学を書くきっか

けにおいて、個人の意図を超えたものが介在していたことを仄めかすのだ。

実際のところコンラッドは作家を生業としていかなければならない必要性に迫られていたし、『オールマイヤーの阿房宮』が単なる暇つぶし以上の完成度を持っていることは明らかである (Najder, *Chronicle* 114-15)。つまり、コンラッドは自身の「イギリス作家」としての起源を語るにあたって、その野心や渴望を巧みに覆い隠し、代わりに自らの血統とイギリス文学の系譜との運命論的な接合を前面に押し出すのである²⁵⁾。

この語りを通して、コンラッドはドラキュラと（そしてヴラディミールとも）決定的な違いを有することができる。ハーカーの日記によると、ドラキュラ城の図書室に収蔵される英書は、古い雑誌や新聞、歴史学、地理学、政治学、政治経済学、植物学、地質学の関連書籍、ロンドンの商工人名録、赤本（紳士録）、青本（議会報告書）、ホイットィーカー年鑑（総合目録）、陸軍・海軍の名簿、法曹名簿、そして地図帳から成る (*Dracula* 19, 24)。これだけ大量のコレクションに、文学関連の書籍がひとつとして含まれていないのは不思議ではないか。あるいはハーカーが書き漏らしただけかもしれない。だがそうだとすればなおさら、この描写はゼノフォビアの本質と直結している。つまり、イギリス人ハーカーが——選択的かどうかにかかわらず——記述するドラキュラとは、自らが標的とする国の歴史や社会について貪欲に知ろうとする侵略者でこそあれ、文学を介して、その文化や精神性と運命的に結びあわされた異国人ではないのである。

こうした『ドラキュラ』とコンラッドの自伝の語りにおける相違は、植物のイメージを重ね合わせるとよりわかりやすく見えてくる。イギリスに渡ってくる際、ドラキュラは、自らの城の墓地から掘り出した土を50個もの木箱に詰め、わざわざトランシルバニアから運び込む。その土の上でなければ、彼は眠りにつくことができないのだ。そして木箱を破壊されたドラキュラは、

25) その巧みな自己創造は、後に Leavis をしてこう言わしめている。「ここに英語という言葉の達人がいる。その独特な性質とそこに結びつく精神的な伝統があったからこそ、コンラッドは英語を選んだのだ」(28) と。

イギリスでの居場所を失い、トランシルバニアに逃げ帰らざるを得なくなる。そうしたドラキュラは、植木鉢に植えられ、永遠にイギリスの大地に根ざすことができないまま、イギリス人の生き血を養分としてすすり続ける外来植物のようにも見える。だからこそドラキュラをイギリスから追い出すことはたやすい。この寝床^ベ／^ツ苗床^ドを壊してしまえばよいのだ。対照的にコンラッドの自伝的語りは、文学を介して、自らの遺伝子的系譜とイギリスの精神的系譜を、まるで接ぎ木をするように接合してみせる。生得的なものではないが、新たな、すでにイギリスの精神的土壌に深く張りめぐらされた根を得ることにより、コンラッドはイギリスとの強固な結びつきを創出することができる。言い換えれば、ドラキュラがどれほど「書かれた英語」を集めたところで、結局のところイギリスから切断されていくのとは逆に、作家コンラッドは、自らが「書く英語」を介してますます強くイギリスに結びあわされていくのである。

だからこそコンラッドは声高にこう言うのだ。「それ [英語] が自分自身のものだ」と図々しく主張はしないが、どのみち私の子供たちの話し言葉となるのだ」(*Personal Record* 136) と。生涯にわたって不完全な英語を話し続けたコンラッドは、その能力の完全なる開花を自らの子孫に、すなわち接ぎ木されたその枝の先に見ていくことができる。一見すると彼をドラキュラやヴラディミールに接近させるかに見えるこの宣言は、しかし彼にとっての英語が侵略のツールとはまったく異なる霊的な「土」であるかのような表出を介して、すでに差異化されている。このようにコンラッドという異邦人は、「書く」ことの魔力を通して、ゼノフォビアの地図の間隙を縫いながら、〈外〉なる〈内〉、あるいは〈東〉なる〈西〉としての自らのアイデンティティを積み上げていくのである。

(筆者は関西学院大学商学部准教授)

参考文献

- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenfeld, 1960.
Berthoud, Jacques. *Joseph Conrad: The Major Phase*. Cambridge: Cambridge UP, 1978.

- . “The Secret Agent.” *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Ed. J. H. Stape. Cambridge: Cambridge UP, 1996. 100–21.
- Captain, A. “Treatment of Seamen.” *Fairplay* 13 Feb. 1885: 327–28.
- Chatterton, E. Keble. *Sailing Ships and Their Story*. London: Sidgwick and Jackson, 1909.
- Conrad, Joseph. Author’s Note. Conrad, *Personal Record* iii–x.
- . *The Mirror of the Sea and a Personal Record*. Oxford: Oxford UP, 1988.
- . *The Mirror of the Sea: Memories and Impressions*. Conrad, *The Mirror of the Sea and a Personal Record*.
- . *The Nigger of the “Narcissus.”* Oxford: Oxford UP, 1990.
- . *A Personal Record: Some Reminiscences*. Conrad, *The Mirror of the Sea and a Personal Record*.
- . *Secret Agent*. Harkness and Reid 1–231. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- . “To Edward Garnett.” *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Vol. 3. Eds. Frederick R. Karl and Laurence Davies. Cambridge: Cambridge UP, 1907. 488–90.
- Curtis, L. Perry, Jr. *Jack the Ripper and the London Press*. New Haven: Yale UP, 2001.
- “The Dynamite Outrages.” *Pall Mall Gazette* 10 Feb. 1885, 4th ed.: 9.
- Ford, Ford Madox. *Joseph Conrad*. 1924. New York: Noble Offset, 1965.
- “Foreign Sailors in British Ships.” *Fairplay* 6 Mar. 1886: 395–96.
- Galsworthy, John. “Reminiscences of Conrad.” *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Vol. 1. Ed. Keith Carabine. 1927. Mountfield: Helm Information, 1992. 135–43.
- Garnett, Edward. Unsigned review. *Conrad: The Critical Heritage*. Ed. Norman Sherry. 1907. London: Routledge, 1973. 191–93.
- Harkness, Bruce, and S. W. Reid, eds. *The Secret Agent*. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- Hope, Ronald. *A New History of British Shipping*. London: John Murray, 1990.
- Jones, Gareth Stedman. *Outcast London: A Study in the Relationship between Classes in Victorian Society*. 1971. Harmondsworth: Penguin, 1984.
- Jones, Susan. “Conrad’s Women and the Polish Romantic Tradition.” Kurczaba, *Conrad and Poland* 33–59.
- Kurczaba, Alex S., ed. *Conrad and Poland*. New York: Columbia UP, 1996.
- Laqueur, Walter. *A History of Terrorism*. 1977. New Brunswick: Transaction Publishers, 2001.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948. Harmondsworth: Penguin, 1993.
- Lee, Alan J. *The Origins of the Popular Press 1855–1914*. London: Croom Helm, 1976.
- Lombroso, Cesare. *Criminal Man: According to the Classification of Cesare Lombroso*. New York: G. P. Putnam’s Sons, 1911.
- Morzinski, Mary. “Polish Influence on Conrad’s Style.” Kurczaba, *Conrad and Poland* 153–77.
- Najder, Zdzisław. *Conrad’s Polish Background: Letters to and from Polish Friends*. London: Oxford UP, 1964.
- . *Joseph Conrad: A Chronicle*. New York: Rutgers UP, 1983.

- “The Outrages Applauded by Socialists.” *Pall Mall Gazette* 26 Jan. 1885: 8.
- Said, Edward. *The Politics of Dispossession*. New York: Vintage, 1995.
- Salt. “English Sailors Manned by Foreigners.” *Fairplay* 13 Nov. 1885: 16.
- Shaffer, Brian W. “The Nigger of the ‘Narcissus.’” *A Joseph Conrad Companion*. Eds. Leonard Orr and Ted Billy. Westport: Greenwood Press, 1999. 49–64.
- Stoker, Bram. *Dracula*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Toledo. “Treatment of Seamen.” *Fairplay* 6 Mar. 1885: 393–94.
- Watt, Ian. *Conrad in the Nineteenth Century*. Berkeley: U of California P, 1979.
- 丹治愛『ドラキュラの世紀末——ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版会, 1997.